第7回「文芸思潮」現代詩賞 発表

第七回「文芸思潮」現代詩賞に多数の御応募をいただきまして、まことにありがとうございました。おかげさまで今年も日本全国および海外から五九八名という多くの方にご応募いただき、充実したコンテストとすることができました。心から御礼申し上げます。

五月末に締め切らせていただきました応募作の中から、まず選考委員会予選担当によって第一次予選、第二次予選、第三次予選の選考が行なわれました。それらを通過した作品を対象に、九月一一日、嶋岡晨、松尾真由美、五十嵐勉の各選考委員により、最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定しましたので、ここに発表させていただきます。

今回もすぐれた作品が多かったことから、ひき続き「佳作」としてより広く顕彰することにいたしました。

奨励賞および佳作の作品の中にも多くの方に読んでいただきたい作品がたくさんありますので、それらの作品も、できるだけ「文芸思潮」ウェーブおよびインターネット誌上に掲載させていただく予定です。御期待ください。

現代詩賞の授賞式は、銀華文学賞、エッセイ賞、イラスト・漫画賞と併せて、明年二〇一二年一月二十八日（土曜日）午後二時より東京都大田区下丸子の大田区民プラザで行なう予定です。受賞者以外の方も御参加できますので、親睦を兼ねて、お誘いの上ぜひ御来場ください。

第八回「文芸思潮」現代詩賞は、明年も今年とほぼ同じ要領で募集を行ないます。締め切りは五月三十一日です。どうぞ奮って御応募ください。

「文芸思潮」現代詩賞選考委員会／文芸思潮

第7回「文芸思潮」現代詩賞

当選

「うちゅるきゅるス庵」「葉緑体かあちゃん」「ぱらぱらまかれ」
清中愛子（神奈川県横浜市）

「演目は弄ぶ」
織和（おりわ） 求（もとむ）（東京都練馬区）

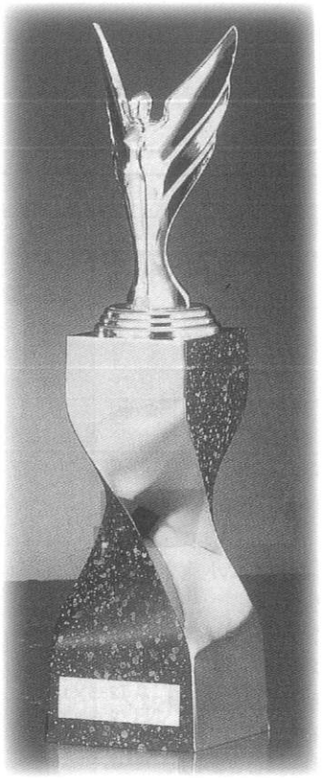
優秀賞

「暴風域」「ばかもの」「狂う春」
福田臨未（神奈川県藤沢市）

「『立会い出産を希望されますか――はい／いいえ』にまつわる試論」
小池陽慈（東京都大田区）

「そうだ、おまえが、穀潰し。」
なないろ（岡山県津山市）

「爪の先を見る」「抽斗の茄子」「私の網膜」
草野理恵子（神奈川県横浜市）



奨励賞

「不滅の春」「陽炎」「白燕」　川原　歩（神奈川県海老名市）
「漂流物Ⅱ」「し」「登校日」高市宗治（福岡県飯塚市）
「ごーしち　ご」「/zwischen/」　木糸ゆさ（東京都杉並区）
「二十一世紀」「石の糸」「けれど」　斎藤澄子（徳島県鳴門市）
「砂の街」「眠り貝」「渇望」氷魚　佐藤駿司（滋賀県大津市）
「鬼交花夢邪歳賦（キコウノハナユメヤクサイノフ）」
「天道虫は水仙のように」石原陽平（千葉県千葉市）
「偽犬」「新しい赤」「夜の本質」山田けんけん（奈良県大和郡山市）
「世界は弔いの脈動」「イノセンス」「光＊告解」　榊　一威（山形県寒河江市）
「少年神社」「朝だった」「いま　ここで」　きくゐ　たかを（東京都多摩市）
「ジャンヌ・ダアク」「はるのノウド」「アザラシの皮で焚火」　日疋士郎（神奈川県相模原市）
「サイレント・トーム」「ブラッド・パラノイア」「ゼブラ・クロッシング」　風　守（岡山県岡山市）
「恋慕」「学校」　井口貴史（東京都立川市）

選評

より熱い生の燃焼を

嶋岡　晨

しまおか　しん

1932年高知県生まれ
詩人　フランス文学者
53　大野純らと「漠」を創刊　形而上学的な叙情詩をめざす
65「永久運動」で岡本弥太賞
99「乾杯」で小熊秀雄賞
元立正大教授
著作に「嶋岡晨詩集」「現代詩の魅力」小説「裏返しの夜空」評論「詩とエロスの冒険」翻訳に「エリュアール選集」などがある

清中愛子の詩。「葉緑体かあちゃん」がよかった。大胆な造語、発想もさることながら、平凡な一主婦（のような存在）が、世界を支配する悪辣な神（のようなもの）に変身する、そのしたたかさがいい。換言すれば、母胎中心主義の幻想の魅力。さらに賢治詩にかこつけた自己パロディーに、独自の表現領域をひらいている。また「うちゅるきゅるス庵」というタイトルは、奇妙でわかりにくいが、宇宙（的）急須（留守）庵……というようなだじゃれか。苦しいユーモアで、あまりよくないが、この作者ならではの奇妙な表現といえなくはない。内容はなかなかのもので、一個の急須の中に一人の女の世界を夢想し、なんだか親しみのわく《空間》を作者はつくり上げてしまった。へんな文字使いはいただけないが、「縄星人」を飛ばすような傍若無人ぶりに、賭けてみたくなった。型を破るという難しいコトを、さりげなくやってのける大胆さに拍手しよう。これからが見もの。

織和求（おりわもとむ）の詩。「演目は弄ぶ」――主題や目的意識の曖昧な詩が多いなかで、技法もその表現の狙いもしっかり決まっている。ト書きめく冗長さはあるが、演劇的設定が作者の思惑によく適合。救いがたい精神様態、病む現代人の生態が、〈役〉としての人物設定によって鮮明に見えてくるのである。

福田臨未（のぞみ）の「狂う春」。否みがたい作品全体の青春性にひかれる。やや型どおりの自己演出という印象がのこるが、常識的でも心情のある一点に深くメスを入れることは、重要。

小池陽慈（ようじ）の「『立会い出産を希望されますか――はい／いいえ』にまつわる試論」。少なからず前衛ぶった気取りは嫌みだが、複雑骨折めいた構想への狡知は現代人の日常のなかの異常心理をよく反映。頭でのたくらみがそのまま詩的イメージに化したような技法は、かなり高いレベルにある。

草野理恵子の「抽斗の茄子」。〈茄子〉の意味がよく掴めないまま、奇抜な感覚表現の展開に忘れがたいものを感じた。リクツをいえば存在の観念を生理へと転化するおもしろさか。見ることがオブジェへ即同化する妙味。だらけた直喩もヘンな効果を生んでいる。

なないろの「そうだ、お前が、穀潰し。」――土俗的な生活のリアリティがいい。〈穀潰し〉のような古い言葉が、働く喜びなどとは無縁な若者の、精力のやり場もない〈生〉の恨みつらみにつながって燃焼している。いわば新しい「農民詩」の一種である。

今回も多くのユニークな個性に出会い、選者としていろいろ教えられたし、現代詩のあり方も考えさせられた。改めて私は自分に問いかける――詩とは何だろうか。鬼面ひとを嚇す式の〈驚き〉も大いに必要だろうが、「人間とは何か」という問いに、心の深部から答えるような〈真実の声〉も必要だろう。表現意欲ばかり先行した〈祈り〉のない、上ずった言葉ばかりでも空しいだろう。一篇に、一行に、一語に、いのちをかけるような熱い全身的な挑戦――などというのは、古臭くてハヤらないのか。いや、そんなことはない。最終的には〈修辞〉を超えた、人生のあり方、詩人のいのちの燃焼度が関わってくるのではないか。わたし（よれよれの七十九歳の三文詩人）は、そんな呟きをもらしている。さて、若いみなさんはいかが。

佳作

「浮標」「白昼夢」「春を待つ」　冰瀬　憂
「大海原」「八重桜の回想」「MERRY CHRISTMAS」風色りんご
「静寂」「こもりうた」「朝が来るまで歌おう」　川田政通
「うしなわれてゆくものの庭」「省東の岸」「植物園幻想」岡崎よしゆき
「背景が絶景」「処女懐胎」「家族」　ただならぬおと
「笑顔」「復活祭」「私（御柱幻想）」　清水一美
「赫玉湖」「はるのしらせ」「名残る宙空」　松岡希草
「メトロポリス３丁目」　千石知佳
「表象」「回想１」「回想２」　苅田　修
「女の性」　コジコジ絵理
「小火きごと」　三国悠吾
「若き空」「あらゆるものたち」「生き残りたち」雨ノ内六九
「イザナギ、イザナミ新燃岳」「原子の火」「鎮魂、故郷の海原よ」　坂本　榮
「源五郎」「卍辻」「山吹」　光城健悦
「指先」「愛憎」「マジック」　かこ
「ないているのはだれ」「ほのほのほの」　いまだまりこ
「二度とない」「片付けられない荷物と燃える火と」　白井やよい
「発端」「いつか朝が来て」「粒子」　山崎裕子
「春の化身」「燃える頬」　中野理子

ファミリー賞

「弁当箱」「海」「画用紙」　いちご
「木漏れるひかりを」「雪」「人魚」　岡素雅子

選考会風景

個性を生かす空間としての詩に

松尾真由美

まつお　まゆみ

1961年北海道生まれ
個人詩誌「ぷあぞん」発行「歴程」同人
詩集『燭花』（思潮社）
詩集『密約―オブリガート』（思潮社）で第52回H氏賞受賞
詩集は他に『揺籃期―メッザ・ヴォーチェ』『彩管譜―コンチェルティーノ』『睡濫』『不完全協和音 consonanza inperfetto』『雪のきらめき、火花の湿度、消えゆく蕊のはるかな記憶を』（すべて思潮社刊）などがある
アンソロジー『現代詩最前線』（北溟社）『小野十三郎を読む』（思潮社）『短篇集　夜』（驢馬出版）
北海道新聞文学賞（詩部門）選考委員

全体的な評でいうと、今年度の投稿作品は昨年よりもトーンダウンした感じを受けた。自由詩は多様な器である。どのような長さでも、どのような短さでも、どのような言葉の使い方でも、詩という器は受け入れてくれるものだが、先ず、それは詩であることが条件であることはいうまでもない。何でもありだが何でもありではない。たとえば、散文詩として提出されても、ただエッセーが短くなったものだとしたら、こちらは詩としては読めない。また、行分け詩の体裁は整えてあっても、物語の筋が短く語られているだけでは、詩として受容はできない。そこには作者本人の詩観が如実に表れる。他者の眼に曝されるということにもっと緊張感を持ってほしい。投稿する意義はここにある。そうした中での受賞作群は一段と説得力を持ってこちらに迫ってきたように感じられた。

当選作の清中愛子「うちゅるきゅるス庵」は諧謔が利いているが、ジョークが冗慢にならずに作品を展開させ、着地（終わり）も良い。これは繊細なカタカナの使い方が功を奏している。同様に他の言葉も注意深く扱われていて、だからこそ内容の大胆さに拮抗していることは注視すべきだろう。急須という小さなものに「宇宙のちょうどど真ん中」を見る感性が自在に繰り広げられ、想像力の楽しさを堪能させてもらった成功度の高い作品といえる。

同じく当選作の織和求の「演目は弄ぶ」。芝居と現実が微妙に交差し、不思議な読後感を覚えた。語られている情景が連によって次元を異にし、けれども、風、光、空などの挿入で場面展開が定置されることで読者は納得してしまう。客観的でありながら主体の身体性が強く出ているため「死体役の男」は徹底して生きているという感触を与え、それが作品の上質な説得力となっている。

優秀賞のなないろ「そうだ、お前が、穀潰し。」は生活体験が作品の底にしっかりと根付いているためにどんなに飛躍した表現でも遊びを感じさせず、生の危機感がよく出ていている。この作者は詩を書かなければならない必然性がある。このような詩をどんどん書いて先に進んでほしい。

優秀賞の草野理恵子「私の網膜」は丁寧な作品展開に好感が持てる。「君」という対象を大切に残酷に扱うところなど観念の余裕を感じさせ、それが詩の飛翔感につながり、この世界は生半可なものではないようだ。

同じく優秀賞の小池陽慈「『立会い出産を希望されますか――はい／いいえ』にまつわる試論」はタイトルどおりに立会い出産の場からの発信であるが、分娩台からコギト、モンスーン、セイショウナゴン、ランダム関数、そしてワカケホンセイインコと固有名詞を頻出させることで世界観を増幅させ、子供が生まれることの緊張を解きほぐす。ここでもカタカナ使いが成功しているが、主題が変わればどのような作品になるかを読んでみたいと思わせた。

優秀賞の福田臨未「暴風域」は書記の拡散をぎりぎりのところで許容できた。風やテレビの場面や稲妻や悲鳴などほとんど混乱を呈しているが、一行目の言葉「でたらめに」がそれを抑えている。この作品で重要なのは「わたしがわたしを巻き起こす時間」「わたしがわたしを超える時間」だと考えるが、今夜から朝に向かう実際の時間軸との折り合いが無造作すぎる。ほんの少しの整理で作品は大きく変わる。

奨励賞の木糸ゆさ「/ zwischen /」は童話的な自由さが心地良く、会話

や擬音を上手く利かせている。同じく石原陽平の「天道虫は水仙のように」は言葉のリズムが良く表象も無理をしていない。作品を縦書きにしても形は残されると思う。氷魚の「砂の街」は言葉の肯定感と綺麗なイメージが心に残った。榊一威の「世界は弔いの脈動」はきつい位置から詩の言葉で救われようとする意識が共感を呼ぶ。読点は個性といえるが、たとえば「光＊告解」は読点がなくてもよく、不用意な扱い方には注意すべき。日疋士郎の「ジャンヌ・ダアク」はジャンヌに寄せた表象と主体の内省がつり合っていて、良い意味での落ち着きがある。きくゐたかをの「朝だった」は言葉を省略することで、感覚的なものを解き放すことに成功している。佐藤駿司の「鬼交花夢邪歳賦（キコウハナユメヤクサイノフ）」は独特の漢語世界であるが、これで続けられれば本物感が出るように思われた。

詩の飛翔性――言葉の翼を

五十嵐　勉

いがらし　つとむ

1949　山梨県生まれ
79「流謫（るたく）の島」で群像新人長編小説賞受賞
98「緑の手紙」で読売新聞・NTTプリンテック主催第１回インターネット文芸新人賞最優秀賞受賞
2002「鉄の光」で健友館文学賞受賞
他に「ノンチャン、NONGCHAN」「ワットプノムへ」「破壊者たち」など

現代詩賞は今年は五九八人の応募があった。二年前は一三〇七人の応募者数があったことを考えると、半分以下に減ったが、これは応募される方々に応募審査料を負担していただくことになった影響が大きいと思う。普通に考えると、応募者数が半分になれば、良い作品が集まってくる可能性も半分になりそうである。しかしそうならないところに、文芸作品コンテストのおもしろさがある。応募数が減れば優秀な作品が少なくなり、たくさん集まれば優秀な作品も集まり、トップレベルの作品の質も高くなると考えられがちだが、実際はそうではない。一〇〇人しか応募がなくても、すばらしい作品が寄せられることもあるし、二千人を超えても、最優秀賞レベルの作品が出てこない場合もある。問題はあくまで応募作品の質であって、応募者数が増えたり、減ったり、賞金が増えたりすることは、寄せられてくる作品の質とは関係がない。賞とその周辺は本来作品の内質とは無関係な位置にある。昨年も触れた通り、萩原朔太郎は自分の詩作品をけっして金銭では置き換えず、原稿料の類いを受け取らなかったそうだが、その徹底した立脚点は一方で確保しておく必要がある。そのうえでこの「文芸思潮」現代詩賞も応募者が何を拠り所にして応募してくるのかということをもう一度見直すべきかもしれない。応募要綱には「言葉の芯をなす強

靭な詩精神を鍛え、人の心の底に響き、永くそこで生き続ける言霊（ことだま）の作品を期待する」とある。また「主催者側から」として「痛切な心の叫び、天を射抜く鮮烈な言葉、水晶のように輝く言葉の結晶、流麗な音韻の調べ、言霊のひびきを期待する」とも付け加えてある。

このなかで私が詩に最も期待するものは、魂のこもった言葉である。人は五、六十年、せいぜい生きて八、九十年の時間しか与えられていない。その制限を突き破って永く他人の心の中で生き続けるような強い言葉、深い言葉を得るには、日常を超えた心の領域――魂の領域に踏み込んで、その力を借りるしかない。言葉に託す強い意志があってはじめて備わる何かがある。希求の度合いが、ある境界を越えて、個の形を突き破る場合、普遍的な力が放射する。その領域をめざしてほしい。

その意味で、前回に続いて今回も、魂の領域に突き進んでいる詩作品にはお目にかかれなかった。私としては当選作として強く推せるものがなかった。この点は大いに不満が残るし、人間の最後の武器としての言葉が、鈍くなっている失望感を抱かざるを得なかった。便利さに厚く被われて、それに負けそうになっている現代人の弱さが露呈している観がある。詩は裸でコンクリートに立ち向かわなければならない。潰され、ミンチになるのは当然だ。しかし物理的にはそうであっても、叫びや怒りや祈りは、それを貫く。それは希求の力を得て、強く求める何かを得て、可能になる。鉄やコンクリート、いやこの地球をも破砕するその力を再発掘してほしい。

トップレベルの作品には不満が残ったが、奨励賞のレベルは多く豊かになって、裾野は全体としてひろがり、水準が上がっている。このレベルは賑やかだった。予選でも、即落選という水準の作品は少なくなっている。それは喜ばしいことだ。

今回の当選は二人、「うちゅるきゅるス庵」「葉緑体かあちゃん」「ぱらぱらまかれ」の清中愛子氏と「演目は弄ぶ」の織和求氏である。

清中愛子氏の詩は、台所などの日常から宇宙や永遠を呼んで二つを結ぼうとする構造に大胆さがあり、それが現代的な色と活発さを帯びているところが評価されたが、詩としての結晶度はそれほど高くない。旺盛な元気さと、思いつきにしろとにかく挑戦しようとする意欲に満ちている点が肯定できた。受賞によって伸びる才能と見て、むしろ未来に賭けた。

織和求氏の作品は演劇空間に生死を嵌め込む構造の露骨さが、ある肌合いを出していて、現代の荒涼と繋がっているように感じられた。この造形性は底を穿ちやすい掘削性を備えているが、地味で、パターン化しやすい短所も備えている。それを避けながらなお深く潜り込んでいく、開拓性が要求される。困難な道だが、持続すれば何かが見えてくるだろう。その方向を期待したい。

優秀賞の「そうだ、おまえが、穀潰し。」（なないろ）は農村の肉体労働のリアリティと現代の言語性とがうまく組み合わされていて、不思議な協和音を奏でている。この点、清中愛子氏と共通した組み合わせ構造がある。この作品を支えているのは、強靭な農村労働の手応えで、底に流れる力強さは大切にすべきで、これを裏切らない方向へ伸びていけば、新鮮な領域が開かれるかもしれない。

優秀賞では「『立ち会い出産を希望されますか――はい／いいえ』にまつわる試論」（小池陽慈）にも注目した。出産を強烈にデフォルメした力作で、規模の大きい現代詩の形に押し込めているが、逆に単純な感動を変形しすぎていて、本来の大きな感情を見えにくくしている点が危ぶまれた。ユニークな題材と、それを強引に曲げ、理知で模様化する腕力はかなりのものがあり、抽象画に通じる表現の工夫は一つの意匠になり得ている。ただ、これが大きな人生の結節点に依拠している以上、これと同等の題材の上に乗らないと、詩が矮小化するおそれがある。悪く言えば変化球に頼りすぎるので、直球の威力を同時に研ぎすませていかないと、三振が取れなくなる危惧がある。

「狂う春」で優秀賞となった福田臨未氏は二〇歳という若さで、年齢にふさわしい起爆力のある言語提示が詩句を繋げている。せいいっぱい駆使する言葉の色と変化は、力を出し切って咲く花のすがすがしさがある。ただよく見れば向かい合っているものが自己の若さなので、その範囲に留まってしまうおそれもなくはない。要は持続するかどうかにかかっているが、言語の躍動性は溌剌としたものがあるので、果敢な詩題への挑戦を、自らが傷つくことをも恐れずにあえてやっていけば、さらに規模の大きい詩性が得られるだろう。

奨励賞のなかにも注目すべき作品が多かった。

木糸ゆさ氏の「ごーしち　ご」は、その技巧と意図とには大胆な試みがあるが、やや内に巻いてしまっている閉鎖性が損をした。字ももっと大きくていい。野球で言えばストレートも磨いてほしい。

佐藤駿司氏の「鬼交花夢邪歳賦（キコウノハナユメヤサイノフ）」は古語にルビを多用した独特の詩表現で、注意を引いた。その方法は一つの可能性を感じるし、豊かな才能も覚えるが、古語の怪奇性を求め、重ね合わせることが、どうしても古色を帯びてしまうところに、乗り越えなければならない課題があるように思う。次作を期待したい。

川原歩氏の「不滅の春」「白燕」の、素直で深い彫りには好感を抱いた。古典的で落ち着いた彫琢には快い詩の流れがあり、それが壮大な自然の生死のドラマを湛えているところに、スケールの大きさを感じさせる。特に「白燕」はいいと思った。優秀賞に値する作品と思っている。

「漂流物Ⅱ」「し」「登校日」に見られるように高市宗治氏の詩は三角形の形や長方形の形の行に形作られていて、しばしば見られる現代詩の技巧であるとはいえ、その技量は認めざるをえない。ただ造形が逆に造形に縛られてしまって、言葉や言葉群が一体となって胸底に届いてくるかというと、ややこころもとなく、視覚的な目新しさのほうが勝ってしまっている。この不自由さを克服して詩としての言葉のパワーを増幅させるのは並大抵なことではできないが、ぜひがんばって乗り越えてほしい。

今回親子で応募して来た岡素雅子／いちご（一二歳）両氏は、詩もあるレベルには達していたし、新鮮な香りが立ちこめていたので、ファミリー賞を贈ることにした。親子で詩作することはすばらしいことだと思う。

「浮標」「春を待つ」の冰瀬憂氏は一七歳という若さで、すでに詩の言語造形を持っている。切れのある変転は美しい屈折を見せてプリズムのような分光力を備えている。あとはこれによってどう大きな対象と向かい合うか、生や世界との格闘をどのように続けていくかだが、一過性には終わらないだけの素質も窺わせる。こういうものを持って生きることはたいへんだが、ぜひ貫いてもらいたい。

今回異色でまたタイムリーだったのは、坂本榮氏の地震と津波、原発事故を扱った詩「叙事詩、イザナギ、イザナミ新燃岳」「原子の火」「鎮魂、故郷の海原よ」である。福島出身の作者ならではの思いが籠められていて、言葉に鼓舞以上の祈りがある。詩は現象に対して反応が早く、復興への願いなど直接であり、有効であることをあらためて教えられた。

いつも応募してくる力量ある詩人たちの作品は、今回は精彩を欠いていて、上位に昇らなかった。あえて厳しくさせてもらった。連続して、あるいは前回以上に鮮烈な作品を提示するのは、たいへんなことである。しかしあえて詩作の試練として乗り越えていってほしい。

現代は便利さが増し、よく行き届いたシステムが生身の人間の日常に深く食い込んでいる。携帯電話をはじめ、電化製品の恩恵や制度の恩恵を浴びている。しかし逆にそれらによりかかり、制度や安全の中で自由や反抗の翼をもぎ取られていることも否定し得ない事実である。規則や制約や管理や数字が便利さの背後にとぐろを巻いて我々の真の自由を奪っている。言葉は我々の最後の自由の砦であり、けっして失ってはならないものだ。しかし時代は容赦なく浸食してくる。この時代の恐ろしい趨勢に我々は言葉を大事にして抵抗し、反抗しなければならない。詩の言葉は、その自由の砦であり、ここが侵される時は、最も重要な翼を失う危機にさらされる。現代の状況は深刻だ。直接の痛みがない分、根本から腐食が広がっている。詩の飛翔性――言葉の翼を、我々はもっともっと鍛えなければならない。詩がまずその翼を持たなくていったい他の何が持つのか。脆弱な言語はすべて時代の津波に呑み込まれていく。屹立する言葉の塔を我々は高く建てなければならない。次回に期待する。

ぱらぱらまかれ

清中愛子

ぱらぱらといのちはまかれ
絶えずどのようなところからも
生まれてくる

意味など必要とせず
わたしたちは
いのちをつなぐ存在として
無数の時間のただ一点として
計り知れない
大きな空間の中に
一瞬光っている小さな炎

じぶんの意思で産まれたのではなく
じぶんの意思で老いるのでもなく
生命の中にある
誰も知ることの出来ない何かの意思が
いのちというものを成そうとする
他者のような存在が
わたしたちは一つのシステムのように
点いては消え
消えては点いて
点滅している

――このいのちのうえで
いったい何者が

訳もなく
わたしに生きろ
生きろと叫ぶのか)

ぱらぱらと
ぱらぱらといのちはまかれ
草の種も
プランクトンも
数多の星も
その一つ一つと同様に小さき者である私たちに
存在意義など一々問わず
偶然生まれ落ちたところで
ただ在るままに在ればよいとでもいうように
いのちは無心に放られ
みな純粋な顔をしている

第7回「文芸思潮」
現代詩賞
当選

葉緑体かあちゃん

あるとき体が緑色になって
いろんな欲望消え去って
太陽の光浴びてるだけで
自分で養分を作れるようになったなら
役立たずでも
無職でも
ボロ雑巾のようにくたびれた主婦でも
誰にも迷惑かけずにイキイキ生きていける

この世の全ての悩みは
空腹からきていると
今月の少女漫画雑誌に書いてあった
そんなら
人類がみんな
光合成できる身体能力か
それに値する科学的方法で
それぞれおのおのが
自分で自分の腹の中を
自然とまかなうことができたなら

こんなにやたらと働かなくても
貧乏だ金持ちだと騒がなくても

努力だ目標だ達成だと気張らなくても
ほんとうに穏やかな心で
生きていける
とおもうのはあまりに呑気か

水に流されるままに流されて
行きついたところに付着して
また流されるなら流されて
他を犯そうという邪心もない
植物プランクトンは
そんなふうにあるがままに透明で明るくて
太陽の光だけ浴びている

わたしが光合成できる母ちゃんなら最強で
更に世に珍しくみどり色の皮膚をしていて
観音様みたいにほほえんで
怒ったりわめいたり憎んだり
右往左往した挙句に
明日を悲観することもなく
雨ニモマケズ風ニモマケズ
ただ太陽を静かに浴びている
そんな母ちゃんに
わたしはなりたい

うちゅるきゅるス庵

清中愛子

ぽっこりト
急須のふたを開ければ
ちいさな暗闇に座る一人の女

二畳台目の台所で

生命のでがらしとなり
社会のでがらしとなり
女のでがらしとなっテ

あとは乾いて役立たず

井戸の中の蛙、ていうか
急須の中の女
眩しい光を見上げても
いつも見慣れた天井の
ただまるい空

今となっては
味も色も出ないカスっ葉だが
ぬるくなった湯の中で
風呂にでも浸かったつもりで

もう一度だけ
ふぎけてみよう化

湯飲みほどのこの身の器
フツーのしあわせテこんなんか

冷えたからだで次第に凍てつく湯に
熱湯ムダに足し入れて
意味もなくふワふワ踊るなら
たくさんの分身にからだ、散らばって
みんなで せえので宙返り
急須の深い暗闇に
きらきら降り注ぐ流れ星となって

何億何兆
星、渦巻いて

やがてここは
茶葉銀河
デガラシ宇宙

（――うすい茶など、いかがですか）

茶柱一本立つように

©Kiyonaka Aiko

清中愛子 ―――――――― きよなかあいこ

1980年生まれ　愛媛県大洲市出身　横浜市在住
東京芸術大学美術学部先端芸術表現科卒業
十代の半ばより詩を書き始め、三年ほど愛媛新聞の詩壇（長谷川龍生選）に投稿。それ以降は美術分野を志す。大学在学中、ダンスと映像を研究し、舞台監督（unipoints代表）、ディレクター、アニメーション制作等の仕事及び、美術作家として活動を行う。2006年より出産を機に活動を一時休止。子育て中に再び詩を書きはじめ、昨年、私家版の処女詩集『宮の前キャンプからの報告』を11部のみ自宅で手作り製本。中原中也賞の最終候補作にノミネートされる。現在は、造船と物流の仕事をしながら息子と二人で暮らしている。

当選

宇宙のちょうど
ど真ん中
小さな幸ねがう女一本
浮かんでル
かみさまさえもしらないとこで

ジ
じじじじ
じじじ　しゅるりしゅり
ト、
そんなしじまに
蠅星人

傍若無人に飛んできて
急須のぬくいワキ腹にひっつタ

宇宙のふたはふたたび
閉ざされて

プッ
と
吹いタ
一息
の
湯気

台所に
白い
花
咲い
タ

●受賞の言葉

子を産むと同時に詩が生まれました。

自然そのものである赤ん坊の生命の力に感化されたのか、私の体にも新たに生まれた自然や生命感のようなものが、言葉をもたらしたように思います。

又、私は家庭に在る主婦としての自分に対しどこか自己疎外感を抱えながら、子供（生命）とは何か、母親であり主婦として生きる私とは何か、貧しさとは、家庭とは、幸せとは何かを考え続けてきました。世に何万とある家庭も主婦も多様でありながら、ごく有り触れたもので、私自身もそんな当たり前の日常に生きながら、主婦業を通して見た世界を詩にしました。

現代は無縁社会と言われていますが、自宅の密室で一人孤独に家事子育てをしている主婦は珍しくはありません。家庭という場は外からはよく見えないもので、社会から最も遠い場所で閉ざされています。それにも拘わらず、そんな場に在る母親たちは、子供の命や健全な成長を任される責任ある立場から、常に身近な人間関係の中で批判されるプレッシャーを抱え、日夜メディアで騒がれる家庭内の事件や少年犯罪など他人事ではない中、現代は子供の心に神経質なまでに気を配らなければ不安な時代です。その一方で、子を人並みに育てることは当然のことであり、しかし多くの女性が人生の大部分を投じるそれらの労力に対して、何か明確な評価を得られることはありません。

現在、子育ての真っ直中にいる母親の世代とは、個性や自分らしさを叫ばれる時代に育ち、そんな世の価値観に在りながら、様々な理由で自分の仕事や夢を断ち切り、所謂、フツーの奥さんになった自分に対し虚しさを抱える人も少なくはなく、そんな現代の主婦たちの心の葛藤や孤独、家庭という閉ざされた世界を、私は同じ当事者として詩によって社会の中に開き、放り出せたらと思いました。

最後になりましたが、この度はこのような立派な賞を頂きましたことを、心より感謝申し上げます。有り難うございました。

演目は弄ぶ

織和　求

ふてくされた灰色の緞帳が西の空に上がり
目を開けたのは　セリフもない死体役の男
何か忘れていることだけは覚えている例の神経症にかかった彼は
死体役という特権を生かし　芝居などそっちのけで
何度も何度も同じ道を夢遊病患者のように歩いた

――黒い風

目に映るのはざらついた日常の背景
マネキンの脊髄には使い回しの古いねじ巻きが取り付けられている
そこへさまざまな国の文字のような　さまざまな形の害虫が群がってきて
鉄臭い錆を消化し　油っぽい分泌物を排泄した
散文的なにおいを残し　やがて害虫は消えていった
すると退屈な芝居が　再び動き始め――
死体役の男は自らに語りかける
お前は死んだのだ　もうここには存在しない人間なのだと
それは彼らの大衆病に感染しないための処方
過去と未来と希望と可能性とのいずれの病にも
医者は道で会うたび　君はどんどん良くなっていると口にする
彼はそれを信じない
医者の口から吐き出される似非錠剤には　虫が好む鉄臭さがあるから
真っ平らな坂道のアスファルトをうなって通り過ぎる乗用車

こちらに向かって歩いて来る老人がもうすぐ彼のそばで
ステッキを落とす
彼は頭が痛んできて　ふところから飴玉を取り出した
本当は全部忘れてしまうのがもっとも楽な方法なのだ
けれども忘却の苦い粉薬はいつも品切れしているから
最後の飴玉をほおばるしか　神経症の和らぐ術はない

乳の香のする震えるように甘い飴玉を舌で転がしていると
男はいつの間にか　古びた吊り橋の上にさしかかっている
灰色の上空がみるみる濃く蒼暗く染まっていく
緑樹は激しく手を叩き　濁った河水がざわめく
揺れる吊り橋は下手くそなヴァイオリンを奏で
どこからか強いフラッシュが……

――白い光

突如として　鉄紺色の空に亀裂が走る
音のない遠雷が疾走するように
男がそれを眺めていると
ひび割れの破片がひとつ地上へと零れて
その割れた隙間に　羽根の形の光が輝いているのが見えた
恍惚とするまばゆい光
残酷なほどに優しい光

彼の神経症は瞬間的に癒される
忘れていたものの影がぼんやりと霞の中から現れる
だがそれを言葉にしようとすると影は霞とともに蒸発してしまい
そのジレンマに男は悶えて涙する
光の羽根は容赦なく姿を縮めていく
粒となり点となり
やがて鉄紺色の大きな殻の中に姿を隠してしまい――

空
残されたのは色も失った暗い空
死体役の男は目を閉じる
そして祈りをこめて甘い最後の飴玉を噛み砕く

ふてくされた灰色の緞帳が西の空に上がり
目を開けたのは　セリフもない死体役の男
何か忘れていることだけは覚えている例の神経症にかかった彼は
何度も何度も同じ道を夢遊病患者のように歩いた

織和　求

おりわ　もとむ

1979　栃木県鹿沼市生まれ
県立鹿沼高等学校を卒業
群馬大学工学部にすすむも授業料未払いで除籍になる
それ以後はアルバイトをしながら芸人を目指す　やがて上京するも、幾つかライブに出た程度で挫折
小説を書き始めるが新人賞を六回連続で一次予選も通らず落選という有様で、これにも挫折　詩を書き始める
経験したアルバイトはカラオケ・焼鳥屋・焼肉屋・パン屋・居酒屋・しゃぶしゃぶ屋・コンビニ・定期清掃業など多岐に渡るが、正社員として働いたことは一度もない
現在は都内のコンビニ勤務
著作や目立った受賞歴はない

●受賞の言葉

およそ詩作とは縁遠い生活を送っている。アルバイトで生計を立ててはや漫画やインターネットで慰める無為の日々。学もないうえ情熱もなく、親からは逃げ、就職からも逃げ、恋愛から逃げ、友人から逃げ、おまけに夢からも逃げ、三十を過ぎた今でも例の三無主義に罹患して、それを克服する気も起こらないという始末。

私は自分を、今時の至って平凡なダメ人間のひとりだと自覚している。特技も長所もなく、自慢話やお涙頂戴話の類もない。ずっとつまらない人生を送ってきたし、このつまらない人生のまま生涯を終えることを確信している。

こんな男なのだから、わざわざ筆をとって書くべきことなど全くもってありはしない。おまけに書こうという情熱までがない。だが、それが幸いしたと今では思っている。なぜなら耳を澄ますことに専念できたからだ。日々の生活の中から、滴るように溢れてきた言葉たちの声を聞くそのために。

これらの言葉たちに私は深く感じるものがある。それを誰かに伝えて共有したいと思う。そしてこれらの声に触れてくれた人々が、各個々人の生活の中でもきっと鳴っているであろう声に、触れる一助となればそれが私の本望である。

この度は本当にありがとうございました。

狂う春

福田臨未

錯乱したい

耳に砂糖を注いで
そっと、塞いだ
青いマグマの声を聞け

その抱擁力で
どこにでも行ける
つぎつぎに蘇生される死語が
どこにも辿りつけないのなら
何度でも名前をつけてやる

胸元にとまった
分厚い羽音をにぎりつぶした
指のすきまからにじみでる、蜜
「恋をしている」

中央線の日射しが
頬をやさしく引っ掻いて
紅潮してゆく今日の日
わたしを少女しつづける
すべてを燃やせ

惑星を絡めて吐きだす誕生で
ゆるやかに離陸していく初夜
名曲は花弁と水たまりで拡散するだろうし
わたしたちは永遠に逢瀬しつづけるのだろう

桜、死体

春、狂う。

触って。
触って。
触れ。

福田臨未

ふくだ　のぞみ

1991年生まれ
日本大学通信教育部　在学中
詩のコンクール神奈川県教育長賞受賞、朝日新聞「声」掲載
2010年　第6回現代詩賞奨励賞受賞、10月号現代詩手帖投稿欄佳作、展示会開催、デザインフェスタ出展
2011年　3、6、8月号ユリイカ今月の作品佳作、展示・朗読会開催予定
http://fukudanozomi.jimdo.com/

●受賞の言葉

これからの方法ばかりを考えている。次の瞬間には、今この瞬間を破ってあたらしい世界を暴きだしたい、今見えている世界を裏切ってやりたいと思う。言葉にすることで嘘になり、わかったような気になっている言葉の意味に、かなしいくらいにすべてが押しこまれてしまう。わたしは、詩は言葉から最も遠いところにあると思っています。まず言葉を憎むこと、疑うこと、そしてそこから走りだすことで、詩にさわろうとしている。

まだよろこびや幸福ではなく、みつめることで鮮やかに漲る世界にふるえていたい。詩にとどまらない詩をつくりだしたい。これからも絶体絶命の境地で臨みつづけます。ふれる、ふれる、もっとふれる。栄光にふれる。やあ、未来。もっと、未来。未来。

選出してくださった選考委員の皆様、ありがとうございました。

私の網膜

草野理恵子

ある出来事がありありと思い出され
網膜に浮かび上がることがある
ある日君が目を覚ますと
君の横に私が立っているだろう
君は意外にも私の言葉に耳を貸し
理解してくれるだろう
クレマチスの花が
君のアパートの壁を伝っていた
煙のような色だ　と君が言った　多分
私を消したいならこの花を引き抜けばよい
だがそんなことを君が考えつく訳はないので
私は消えない　消えてやらない
私は毎日君の横に立つ

いや　私は君の側へは一生行かない
君は目が覚める度
誰かが来るはずだと思うが
全く誰か思いつかない
いつか来そうなものだが
一生待っていても誰も来ない

●受賞の言葉

私は三歳から十二歳まで父親の仕事の関係で水族館の中に住んでいた。

五時の閉館の音楽『蛍の光』を聴くと私は家を飛び出し、カニクイザルのお母さんと子どもに餌をやり、網の間から手をいれトドに挨拶をし、ミーンと甘えた声の鹿を撫で、オオサンショウウオが動いたかどうかを確認した。（水族館なのに動物園みたい）そのように動物たちと言葉を交わした。隣の家まで歩いて一〇分以上かかる一本道、カラスに頭をつつかれながらいつも詩のような歌のようなものを口ずさんでいた。

日中は売店で三色アイスを食べながらベッドに寝転んで少年少女世界名作全集を読み続けた。洋服箪笥の奥に別の世界があるのを願いながら……

大人になっても変わっていない。何かを口ずさみながら、紙と鉛筆の向こうに別の世界を創りながら…そして、やっぱりアイスを食べている。

この度は優秀賞に選んでいただき、本当にありがとうございました。

ある日君は目を覚ますと
枕元に蛇の抜け殻を見つけるだろう
君はその抜け殻を口にする
君は教師なので教壇に立つ
目の前に女生徒がいる
女生徒は下を向いている
なのに声に出さない口の言葉が読める
「愛してしまったでしょう　きっと」
女生徒はもっと下を向く
胸の形が見える
君は何を教えているの？
『愛してしまったことについて』
『蛇の皮を食べると
卵のような胸を持った女生徒を
愛してしまうことについて』
ふと女生徒は顔を上げる
君は見てしまうだろう
見てしまってはいけないものを
半ば知りながら
目には細い線がついている
卵の黄身の中に一本の黒い線
君は叫ぶだろう
嫌悪をともなう者を愛してしまうことに
苦悩するだろう
その女生徒は私であるかもしれないことに

君は思い当たらない
君は吐き出すだろう蛇の皮を
その皮で寝袋を作り
愛に包まり眠るだろう
いつまでも眠り続けるだろう
会ったことがある？　どこかで…
どこかで偽物になってしまった私を
眠りのなかで君は手を離し破片にするだろう
その破片が刺さることがある
本当の私の網膜に

草野理恵子
くさの　りえこ
1958年北海道室蘭生まれ
新潟大学教育学部卒業
千葉県立四街道養護学校勤務
横浜市在住
『ユリイカ』『現代詩手帖』『詩と思想』『びーぐる』などに入選・佳作
さいたま文藝家協会さいたま市長賞
同　教育委員会教育長賞
神奈川新聞社文芸コンクール佳作
日本歌曲コンクール詩部門佳作
コスモス文学新人賞奨励賞　等

「立会い出産を希望されますか——はい／いいえ」にまつわる試論

小池陽慈

あれほど意固地に閉じていた
分娩台のM字の中心は
何の予兆も前触れもなく
ぱかあ、
と、
円形に広がるが、
その縁にナノ単位の隙も許すことなく嵌め込まれた
頭頂部（と思われる西瓜状の半球／もしくは彼方の地球の裏側からぬるりと半分顔を
出した月）の一点から
体液まみれの毛髪のマーブル模様が放射する、ぐるぐるぐる
くらりと吸い込まれそうになるぼくのコギトを近代の哲学者がぼくそ笑む
これではいけないと危ぶみ
ぼくは、
ぼくの網膜をよぎることのない野生のワカケホンセイインコの緑の軌跡を思う。
分娩室の矩形の窓の対角線
学名:Psittaeula krameri manillensis（ピ？　プ？　シッタキュラ？　それから？）
東京都品川区旗の台に、モンスーンに咲き乱れる熱帯の花弁ではなく
仲原街道の撒き散らす粉塵を啄ばむ、
という、
スリランカ原産の、外来種

●受賞の言葉

分娩室で棒立ちになりながら、新しい生命の誕生するのを呆然と眺めているばかりだったあの日から、一年と二ヶ月が経ちました。一年と二ヶ月、ぼくはあの日の分娩室さながら、ただただ、たじろいでいるばかりでした。

数ヶ月前、大病が見つかった母は、一ヶ月ほど、入院しました（現在は、予後に気をつけながら、通院治療に切り替えています。血液の、病気です）。

同部屋の患者さんに、新米ママさんがいらっしゃいました。お子さんは五ヶ月だそうです。彼女は東北の方でした。震災のために、旦那さんの実家があるこちらの病院に、転院されてきたとのことです。彼女の病気はもちろん、母と同じものでした。

父も、持病が悪化し、現在入院治療中です。先日見舞いにいった際に、「文芸思潮」現代詩賞にて優秀賞をいただいたむね、報告しました。酸素マスクの向こうで、痰をからませながら、「うー、うー」と呻くその口が、満足そうに笑っていたというのは、ぼくの思い過ごしかもしれません。

この雑文をしたためている部屋の隣が、我が家の寝室です。今、娘を寝かしつけるために、妻が子守唄を歌っています。絶妙な破調の音階です。だれにも真似できません。寝息が聞こえてきました。波打つ小さな胸いっぱいに、また明日からの「生」を、ふつふつと、醸しているのでしょう。

ぼくも、拙いながらも、「生」のことばを、これからも、精一杯、紡いでゆきたいと思います。

母と同部屋だった彼女の、お子さんの歯茎にも、そろそろかわいらしい歯が顔をのぞかせていることでしょう。

どうか、彼女が、今頃ちぎれんばかりに乳首を吸われ、「アイタタタタ」と、顔をしかめていますように。

優秀賞

平安ではなかった平安の都の宮中で
ニホンゴを強いられた熱帯の鸚鵡に
セイショウナゴンが扇で隠した口もとは、曲がっていたとか、いないとか
エコー写真の平面が体積を持つという瞬間は
「神の最初の一突き」からのランダム関数に
また一個の変数を加える
垂直の空から、
だれにも知られることなくサンショウウオの卵のゼラチンを
つぶつぶ噛み締める環境省指定特定外来生物アライグマの
奥歯の苦虫を思うとき、
かぶり、
と、
吐いた羊水の、産声は付属物に過ぎないのに
皮肉にもそれが、ぼくの脳髄を二次元に回帰させる
という、
パラドクス
薄目を開いたその瞳孔の中心核にとぐろ巻く数多の数列よ
ぼくをとらえる方程式は、そこにインストールされているのか？
ダーウィンの網の目に捕縛された創造論の哀れな末路のように、
ぼくはマリアナ海溝より深い断絶を挟んだ
たった半歩の決して届かぬ手前から
カンガルーケアを凝視しているしかないというのに。
青ざめた妻の波打つ肩越し
圧縮された成層圏の無色透明な澱が
ステンレス製の窓枠に
すっかり抽象化されている
鏡となった窓ガラスに一瞬映る
直立不動の銀縁メガネを真一文字に切り裂いてゆく
ワカケホンセイインコ
学名:Psittaeula krameri manillensis（ピ？　プ？　シッタキュラ？
それから？）
侵略的外来種、
の、
ぼくの網膜では捉ええぬ、緑の軌跡を思いながら、
それでもぼくはふと、小刻みに震える利き腕でないほうの人差し指で
赤子の頬を、押してみたのだ

小池陽慈

こいけ　ようじ

1975年　北海道札幌市生まれ
1994年　埼玉県私立自由の森学園卒業
1996年　早稲田大学教育学部国語国文科入学
2002年　同大学卒業
2002年　早稲田大学大学院教育学研究科入学
2006年　同大学院中途退学
現在、予備校講師。東京都在住

そうだ、おまえが、穀潰し。

なないろ

苗箱の隅に心臓
ずっと望んでいた
ザッザ　ザッザ　ザッザ
安定期に入るまでに間に合いそうよ
ネジ穴からは薊(あざみ)が覗いて
温かいの、綿帽子
無事ミミズに溶け切れたら合格
点々と　走り出す
脈は
首括る乳歯／石灰のおしろい／膣内で視た絵ノ具
ぜんぶわたしのまねごとです

畳から座布団から電球からマチ針から
交ざり合えるのか、どうか
一人で育てられるのか、どうか
白状なさいとわたしを責め立てること
腐ったあとの筋は／手アカだらけの、歪首／脅迫めいた日記
（わたしがすっぽり入るくらいの）
毛虫ほどの隙間があれば憶えておけます
地面を視ないでも持ち上げられる／重くなったね
ただ血が繋がっているだけの残像でしか、

ないのに

はじめて獲物になれたときの、
タイヤの跡
なぜだか、
捨てられないの
塩漬けにして残しておきたい

ゴム長靴が頬にふれて
真っ赤なかさぶたと、濃墨の粘りは、
人知れず踏みつけられる
今更、はだかでは泳げない
（太陽の切れ端はお安くしておきます）
円くなる背中にじっとりと汗を　書いている
木炭は黙ってすり減っていくけれど、

代わりに汚いと言って、
（特徴の無いわたしに）

ザッザ　ザッザ　ザッザ
どろのなかではみんなおなじ　冗談です

寒気が、する、
収穫の朝でした。

●受賞の言葉

このような素晴らしい賞をいただけて本当にうれしいです。わたしがいつも見ているのはボロボロになりながら農業をする両親の姿と、毎年、強烈に芽吹く緑の美しさです。

今年の春、種籾から突き出たたくさんのちいさな根がわたしに話しかけてきました。

おそろしくて鳥肌が立ったのを憶えています。苗箱で育てられていたのはわたし自身でした。でも少しだけ、土と同じような温度になれた気がしました。

泥と肥まみれになって、田んぼに寝転んでいるわたしはとても幸せだと思います。

今回の受賞を糧に、これから、わたしのことばも少しずつ耕していけたらいいなあと思っています。

本当にありがとうございました。

なないろ

1986年岡山県の農家に生まれる
5歳より書を始める